

2025年度紀要発刊にあたって

京都芸術大学舞台芸術研究センター所長

安藤善隆

京都芸術大学舞台芸術研究センターは、舞台芸術の創造過程の総体を研究対象として、「創造の現場」と「学術研究」の有機的な結びつきを図るべく、2001年4月に発足しました。それ以来、20年以上にわたって、本格的な劇場施設である「京都芸術劇場」を活用し、舞台芸術の「創造」と「研究」の融合による独自の実践的な研究活動を行っています。「創造する伝統」という理念のもと劇場を運営、多様性を持ったプログラムを実施するため舞台作品の公演のみならず、研究会、ワークショップ、出版など、さまざまな主催事業を実施するとともに、多彩な研究の実現、研究成果の発信、研究者の育成を目指しています。

本研究センターを母体に、2013年に設立された「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」(文部科学省認定「共同利用・共同研究拠点」、2013・2024年度)、およびそれと密接に連携しながら実施された、科学研究費基盤研究(A)「大学の劇場」による「ラボラトリー機能」の構築―芸術系大学の実践的研究モデル(2017―2019年度)、「アジアの舞台芸術創造における国際的な「ラボラトリー機能」の実践的研究」(2020・2022年度)では、「大学の劇場」(＝京都芸術劇場)を拠点設備として、「ラボラトリー機能」という独自の研究概念を提案しながら、その有効性を多角的に検証し、これまでも大きな成果をあげてきました。このように本学の特色は、なによりもまず、多種多様な舞台芸術作品の上演が可能な劇場施設である「京都芸術劇場」(春秋座「客席数843席」、studio21「客席数最大130席」)を所有しているところにあるといっぴよいでしょう。2001年に文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア」の助成を受け設置された同劇場は、通常イメージされるような「学内ホール」とは大きく異なります。「春秋座」は、歌舞伎を完全なスケールで上演することが可能な本格的な劇場施設であり、また「studio21」は、可変的な客席を持つ高性能のブラックボックス型の劇場となっています。いずれも能・狂言、歌舞伎、落語、琉球舞踊といった伝統的な演劇や芸能から、現代演劇・舞踊、先端的なマルチメディアパフォーマンスに至るまで、現代の多彩な舞台作品のニーズに応えることのできる設備として使用されています。また、日本を代表する国際舞台芸術祭「KYOTO EXPERIMENT」京都国際舞台芸術祭」の主催団体として演目を上演し、舞台芸術に関わる社会実装系の授業を取り入れるなど、本学の学生教育にも広く活用されています。

この京都芸術劇場の運営を担っている本研究センターでは、具体的な舞台芸術作品の創造・発信事業を「ファクトリー機能」、先進的な舞台芸術作品の創造を視野にいった、実践的かつ多面的な実験や調査・研究、試演的なプレゼンテーションの総体を「大学の劇場」が果たすべき「ラボラトリー機能」と定義し、その社会実装を研究機関としてのミッションのひとつに位置づけています。2002年に発刊された本研究センターの機関誌『舞台芸術』は、各号ごとに特集を設け、古今東西のパフォーミング・アーツを今日的な視点で切り取り、21世紀における舞台芸術の新たな可能性について考察していますが、それはまさに京都芸術劇場で行われる公演や研究活動を報告する場であり、そのプロセスを公開する場にほかなりません。

そして、今回発刊する2025年度『舞台芸術研究センター紀要』は、その研究成果をよりいっそう広く社会へ還元するため、引き続き企画されたものです。分野の発展を担う研究者の論文に加え、若手の研究者や学生による創作ノート、レクチャー採録等をこのような形で公開することは、研究機関としての使命の一環を果たすことになるかと確信しております。とはいえ、今後、体裁内容とともにさらに充実させてまいりますので、改めてさまざまなご批判、ご指導をいただければ幸いです。関連諸分野の進展に、いささかなりとも寄与して参りたく存じますので、本研究センターへのご支援の程、引き続き、何卒よろしくお願い申し上げます。